

英語をしゃべる3歳児

第1回

仲間のなかで、
仲間とつながりながら、
いつしょに育つ

発達を見る眼をゆたかに、 おおらかに



鳥取大学

寺川志奈子

てらかわ しなこ／鳥取大学地域学部。研究テーマは「子どもの自我、自己、および社会性の発達と教育的支援」について。共著に『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価1 子どもの「ねがい」と授業づくり』(クリエイツかもがわ)など

4年におよぶコロナ禍から、ようやく元の生活に戻る動きが進んできています。それでも「子どもたちに『黙食』の習慣がすっかり身についてしまって、保育士が求めていなくても（3歳）以上児さんは給食を静かに食べるんです」と、ある保育士さんからお聞きしました。子どもたちにとても、長かったコロナ禍の時間が想像されます。

また、厚生労働省の調査によると、新型コロナの感染拡大が続いた2020年からの3年間、保育所の待機児童数は調査開始以来連続で過去最少でした。その大きな理由に感染を中心とした保護者による保育所の「利用控え」があつたと考察されています。

蓮くんもようやくコロナが収まってきた4月に、3歳児クラスに入園しました。蓮くんにとつては初めての集団生活です。驚いたことに、3歳の蓮くんは英語をしゃべるのです。部屋の壁飾りを指さして「スター」「レインボウ」、カラフルな絵本を開くと「レッド、ブルー…」、ほかにも「ヴィーナス、ジュピター…」と惑星の名前まで言えたりします。まるでネイティブのような美しい発音です。さらには、「蓮くん、お着替えしようか」と保育者が促すと「ノーッ！」と言つて床に寝そべつて動こうとしなかつたり、友だちが走っているのを見つけると「ストップ」と声をかけたりといった様子です。

その一方で、蓮くんは日本語で自分の言いたいことをうまく表現することがむずかしいようです。たとえば、丸をいつ

ぱい描きながら何かを伝えようとするのですが、英語と日本語の発音が入り交じったような（？）ジャーゴンのことばで、意味が伝わりません。あるいは、英語の発音が流暢すぎてこちらが理解できないのかも、と思つたりするほどです。

蓮くんは英語圏で生まれ育つたわけではありません。それなのに、流暢な発音の英語に比べて母語の表現がとても幼いのはなぜだろう、入園までに英語の早期教育を受けてきたのだろうか：かかる大人たちはとても不思議に思つていました。

実は蓮くんが英語をしゃべる理由はユーチューブ（YouTube）にありました。生まれた時からずっとコロナ禍の中で育つた蓮くんは、3歳で入園するまで、在宅でパソコンに向かう保護者さんと昼間はふたりだけの生活でした。外出も制限され、同じ年ごろの子どもと交わる機会もほとんどなく、家でお気に入りの英語のユーチューブをずっと見続ける生活をしていたそうです。親子ふたりだけで家の中で過ごす長い時間をユーチューブに頼らざるを得なかつた子育てのしんどさが想像されます。

蓮くんのネイティブのような英語は実際のところ、コロナ禍によって親子が閉じた空間に追い込まれ、人と出会うこと、新しい外の世界を探索することといった本来はあたりまえのようにあつた子どもの健やかな成長を支える環境が奪われてしまつた結果だった、ということがわかりました。

溢れるねがいと自分の思いを表現する言葉

入園したばかりの頃は床にゴロゴロしがちだった蓮くん

は、園での新しい生活を通して、友だちがやつてていることを見ながら、『自分もやつてみたい！』といふねがいが溢れはじめます。初めてのブール遊び、砂遊び、木の実集め、色水づくり、三輪車こぎや雲梯のぶら下がりへの挑戦など、いきいきとした表情でリアルな外の世界にあるたくさんの楽しさを発見していました。夏の頃には、腕の力が強くなつて雲梯にぶら下がれるようになつたことがうれしくて、「今日は、できなかつた！」と何度も繰り返し、保育者に自分を見てほしいことを言葉で要求します。「今日は」と「前は」の、時間の言葉の使い方を混同しているのですが、蓮くんなりに前はできなかつたのに今はできるようになった自分を誇らしく言葉でアピールする様子がみられるようになります。

そして、この頃になると蓮くんの英語はすっかり影を潜め、ほとんど聞かれなくなります。『知つてること』を英語で発していた蓮くんは、『自分の思い』を自分の言葉で相手に伝えることができるようになりました。仲間の中でこそ新しいことへ挑戦したいねがいが生まれ、その中で湧きあがつた思いを伝えたい大好きな相手がいるからこそ、子どもにとって本当に大切な言葉が引き出されていくのだというふうを蓮くんの姿から学ぶことができると思います。

入園後の蓮くんの目に見える成長と思いを伝える言葉は、ができます、毎日お弁当を持ってきていました。食べられるも